

【ピンクはおふくろの勝負色】

四十年余り前に遡る。中学の入学式でのことだ。おふくろは三十代後半で、僕の小学校時代の友人たちの母親とどこも変わらない、ごく普通の女性だったと思う。入学式の朝、おふくろの着ている服を見たときに、その認識は一変した。

新調したピンク色のスーツだった。

「母さん、どうしたの、その服……？」

という言葉が咄嗟に口を突いて出た。

「入学式用に、お友だちに頼んで作ってもらったの。おニューよ、ステキでしょ！」

当時の入学式と言えば、まだ着物の方が多くて洋服は少なかった。しかも、黒の礼装が普通だった。それを知っているはずのおふくろがピンクのスーツなのだ。

「この生地、けっこう高かったのよ。へそくりはたいて買っちゃった。一着作っておけば、これからも授業参観やPTAのときに着て行けるしね」

確かに光沢のある高そうな生地には見えた。

いや、そんな問題ではない。

もし、このスーツを着て入学式に出れば、今後、僕が置かれる状況はおおよそ見当がつく。何とか阻止しなければと、おふくろを必死で説得したが無駄だった。

体育館の中では、おふくろは飛びっきり目立ち、周囲の視線を一身に集めていた。でも、まだそのときは、誰の母親かわからなかったのよかったです。その後、クラス別の集合写真を同伴の親も交えて撮ったときには、僕のクラスの“誰か”の母親であることが知れた。

翌日からまるで犯人捜しのごとく、クラス中で『ピンクの息子は誰だ？』ということになり、僕の母親であることがバレてしまった。

僕はいじめられるのを覚悟した。

そのいじめが未来永劫続くのではないかとさえ思ったほどだ。

ところがである。

「おまえの母さんさあ、凄く目立ってカッコ良かったなあ！」

と、クラスの連中が口々に言うのである。

僕は照れながら、

「いやあ、それほどでも……」

を繰り返した。帰宅して、その話をすると、おふくろは自慢げに「そうでしょう！」を連発した。

この話は、これで終わらない。

おふくろは、これに気を良くしたのか、それからというもの、礼装はピンクになり、家の中にはピンク色のものが増えていった。

そのおふくろも今年八十歳。毎日、スイミング・スクールに通う自称スイマー。女性の最高齢として、スクールの人気者らしい。ピンクパンサーならぬ “ピンクバアサン” と呼ばれ、ピンク色の水着を着て、今日も元気に泳いでいる。